表裏一体

都市に見られる表裏同時存在空間

指導教員　吉松秀樹教授　　印

7AEB2237　細金 伸倫

1. 問題意識「都市の表裏」

都市における表と裏の表情に着目した (fig.1)。普段私たちは表の表情によって都市を認識しているが裏の表情にも都市それぞれの個性があるのではないか。

fig.1 都市の表、裏の表情

2. 調査・分析「広尾における表裏一体」

様々な都市をサーベイしたところ渋谷区広尾では表、裏の表情が同時に認識できる空間を見つけた (fig.2)。またただの残余空間ではなく多義的な空間であった。

fig.2 住宅のベクトルの違いから生まれる表裏同時存在空間

広尾は長屋の名残により１街区につき３列の住宅群が形成されている。これにより屈折したパスが生まれ、迷路性、入りずらさを作り出している (fig.3)。先に進むと商店街の人、住民の外部に対してのふるまいの違いが見られ、また住宅の向きが不規則であるためパスに対して表であるエントランス、裏である勝手口などの異なる表層が不規則に連続する (fig.4)(fig.5)。これらの要素が表裏一体の認識を生み出す。

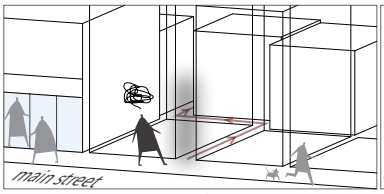

fig.3 商店街からの入りずらさ

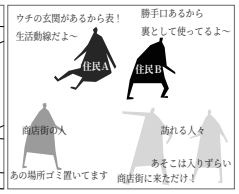

fig.4 異なる空間の使われ方

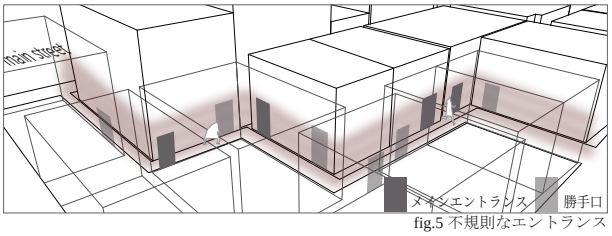

fig.5 不規則なエントランス

3. モデル化「フレーム表裏一体モデル」

広尾でみられる表、裏の不規則な連続、屈折などの要素をフレームの２段階の織り込みによってモデル化する。１段階目の織り込みは表、裏が混ざり合うことはないが広尾のように屈折が生じ、進まなければ空間の全体像が把握できない。さらに織り込むことで表と裏の境界がほどけ、双方の認識が不規則に連続することで表裏一体となる (fig.6)。

fig.6 フレームによる表裏の生成

4. 建築「表裏一体住宅」

モデルを用いて表裏一体住宅を提案する。二段階の織り込みによる空間に住宅の諸機能をあてはめることでアイレベルでの繋がり、屈折による空間の不規則な連続が生まれる。これにより明確な表、裏のないシームレスな住宅を作り出す (fig.7)(fig.8)。

fig.7 Model photo 連続する空間

fig.8 表裏一体住宅 Plan